

長編ハードボイルド

友よ、背を向けるな

生島治郎



実業之日本社

友よ、背を向けるな

昭和五十四年三月二十五日 初版発行

著者 生島治郎

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三(五六二) 四三一一

振替 東京一―三二六 千二〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル内

電話 〇六(三二二) 一五七三

印刷所 大日本印刷

製本所 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© J. Ikushima

0093-502310-3214

友よ、背を向けるな ■ 目次

奇妙な訪問者	5
人買い	45
追跡のサンバ	84
容疑者	116
殺しの背景	148
出撃	180
さらば、ブラジル	212

装画／園田静香
装帧／サン・ブランニング

友よ、背を向けるな

奇妙な訪問者

1

それは、まるで梅雨みたい、毎日じとじと雨ばかり降りつづいて、夏のある日のことだった。

私自身の内心も、その気候にふさわしく、一向にバツとせず、爽快とはほど遠い気分だった。

もっとも気候のせいにするわけにはいかなかった。

私がうつとうしさをもちあましてゐるのは、自分自身のせいだった。

ようやく手に入れたわずかばかりの調査料を、ついで調子に乗って、一晩のうちに吞みつくしてしまったのだ。

おかげで、私は相変らずとぼしい預金通帳と、宿酔いに悩まされながら、事務所のデスクにすわったきり、雨の降りしきる窓外をぼんやり眺めていた。

デスクの上には、本日、五杯目のコーヒート、二十三本目の吸いかけの煙草が置いてあった。

カフェインとニコチンで宿酔いを追っ払ってやろうと企んだのだが、その企みもはかない望みに終りそうだった。

コーヒーは胃の中をますますムカムカさせ、煙草の煙りは口中をネバネバさせるだけだった。

それでも、残ったコーヒーを吞み干し、吸いかけの煙草をくゆらせた。

誰も認めてはくれないだろうが、私はきわめて良心的で几帳面な私立探偵なのである。

いったん、こうと決めたら、最後まで決着をつけずにはいられないタフでストイックな性格の持主のプロフィールショナルである。

たとえば、胃潰瘍になろうと、肺ガンにかかる怖れがあろうとも、自分で吞むと決めたコーヒーは残してはならないし、吸いかけの煙草をそのままにしておくわけにはいかない。

とはいうものの、コーヒーを吞み干し、煙草を吸い終ったとたんに、吐き気がこみあげてきた。

私はあわてて立ち上り、事務所の裏手にある小さなキッチンの中に走りこんで、流しの中に、思い切り吐いた。

流しの上に吐きだしたものはコーヒートアルコールの混ったひどい臭いのする液体ばかりだった。

考えてみると、昨夜から今日にかけて、なにも食べていない。

呑むときには、私はなにも食べない習慣だし、今朝からは宿酔いで、なにかを食べられるような状態ではなかった。

私は何度も吐きつづけ、しまいには、胃液らしい黄色いものが出てくるだけだった。

すべて胃の中のを吐きだしてしまおうと、いくらか気分がすっきりした。

(妙にイキがるのはやめようじゃないか)

と私は自分自身に云いきかせた。

(なにが几帳面で良心的だ。なにがタフでストイックなプロフェッショナルだ。それより、ちっとは自分の身体をいたわるがいい。四十を過ぎたら、若いときみたいな無茶はきかないんだぜ)

流しの上にかかっている、ふちの欠けた鏡をのぞきこんでみたら、蒼白い顔をした生気のない中年男の顔がうつっていた。

私は口の端をタオルでふき、事務所へもどった。

事務所へもどってみると、いつの間にか、一人の老婆がデスクの前に立っていた。

少なくとも、七十歳は越しているだろうと思われるが、腰はピンと張り、眼はキラキラと輝いていて、あと十年以上はあの世に行きそうもなかった。

身にまとっているのは、夏にもかかわらずグリーンジャージイのワンピースに、黒いオーバーアールである。その両方とも、かなりの年代もので、袖口や襟のあたりがぼつれていた。

顔色は真黒に陽灼けして、皺だらけだった。真黒に陽灼けた顔色と対照的に、髪は真白で、それをきつくひつつめてうしろでまとめている。

髪をきつくひつつめているせいで、けわしく強情そうな眼が、つりあがり、いっそう鋭くみえた。

大きな茶色のバッグを胸もとあたりに抱きしめていて、その両手は永年野良仕事に従事してきたかのよう

に、節くれだち、頑丈そうだった。

「あんたが、この事務所の所長さんかね」

そう訊ねた声は、男みために野太かった。

「そうです」

と私は答えた。

「わたしが、この事務所の所長の志田司郎です」

「ふん」

鼻を鳴らし、老婆は事務所中をじろじろ見まわした。

「ここは、あまり景気がよさそうじゃないね。あんた、私立探偵として、腕のいい方ではないんじゃないかの」

「腕はいい方なんですが、なにしろ、仕事を選びますんでね。気に入らない仕事はひき受けないことにしているんです」

と私は胸を張った。

まんざら、虚栄心を満足させるための言辭ではなかった。

実際、私はどんな仕事にでもとびつくもりはない。離婚の調査とか、スキャンダラスな事件の調査を

して、恐喝者の手先になるような仕事は一切ごめんこうむっている。

「つまり、良心的な仕事をしているから、貧乏をしている。そう云いたいんかの？」

老婆は皮肉な口調で云った。

「良心的な仕事もけっこうだが、酒を吞みすぎるのは感心でけん。さっき、ここまで、ガアガア、鶯鳥が鳴くみたいな声が聞えてきたが、あれはあんたの声じゃろう。宿酔いで吐いとったのとちがうのか？　こうしていても、まだ、酒くさい臭いがぶんぶんするぞ」

老婆はなにか妙ななまりのある声でしゃべりながら、低い鼻をひくつかせ、皺だらけの顔をしかめてみせた。

「どうやら、あなたの方が、わたしより観察力が鋭いらしい。私立探偵をやとうより、自分で私立探偵を開業した方が、成功しそうですな。いったい、なんのご用で、この事務所へいらしたんです？」

「もちろん、調査してもらいたいことがあったからじゃ」

老婆は茶色いバッグをデスクの上に無造作に置いて

た。

「ところで、あなたの調査料というのは、どれくらいかの？」

「調査の種類にもよりますがね。ふつうは、一日に三万円。かかった経費は別にちようだいすることになっております」

「一日に三万円かい。とすると、約三千クルゼーロになるわな。それは、高すぎる」

老婆は、私にはなんだか意味不明のことをつぶやいた。

「おまけに、旅費その他の経費を加えると、えらい出費じゃな」

「いったい、どういう調査で、どこまで出張しろとおっしゃるんです？」

と私が訊くと、意外な返事がかえってきた。

「ブラジルのサンパウロまで行ってほしいんじや」

老婆はこともなげに云つてのけた。

「そして、わしの息子の行方を探してほしい。経費の方は、まあ、仕方がないじやろう。思い切つて奮発することにしよう」

茶色いバッグを、老婆が開くと、そのなかには、一万円札の束がぎっしりとつめこまれてあった。

「ちよつと待って下さい」

老婆がバッグの中から一万円札をつかみだそうとすると、私はあわてて制止した。

「いきなり、サンパウロへ行けといわれても、わたしにだって都合がある」

「どういう都合があるんじや？」

老婆の眼がじろりと私をにらんだ。

「ひまをもてあましているくせに、ぜいたくなことを云うんじやない。どうせ、日本にいたところで、ろくな仕事にありつけるわけじゃなからうが。それより、仕事をしながら、海外旅行ができる方がよっぽどよからう。もし、息子の行方をつきとめてくれたら、調査料の他に五十万円のボーナスを出してやろう」

「たしかに、けつこうなお話ですがね、もう少し、事情をうけたまわらないと、なんともご返事の申しあげようがありません」

さすがの私も、この老婆の強引さには、いささか手を焼いた。

「第一、あなたのお名前も職業もうかがっていない。息子さんがどういう状況で行方不明になっているかも、わたしにはわかっていないんです。これでは、調査のしようもないじゃありませんか」

「それもそうじゃったな」

老婆は齒をむき出して笑った。ジャングルに巣くう年老いた猿に笑いかけられたような心地がした。

「では、事情を説明してやろう」

デスクの前にある来客用の椅子に、ちょこんと腰を下ろし、老婆は話しはじめた。

老婆の名前は、藤村琴といい、一九三四年に良人とともにブラジルへ渡った。

以来、四十年余あらゆる苦勞の末、サンパウロ州内に農場を手に入れ、それがようやく軌道に乗って、巨万の富を築くことができたのだが、その間に、生れた子供たちは次々と亡くなり、良人の銀造もつい昨年、琴を残してこの世を去った。

実子を亡くした銀造夫婦は、自分たちのあとを継がせるべき養子を探した。

その養子は、やはり血がながっている方がいいというので、藤村銀造の弟の次男幹夫を選び、ブラジルへ呼びよせた。

それが三年前のことである。

ところが、幹夫は農場の経営をきらい、サンパウロ市中へ出て、日系の商社へ勤め、同時に、二世の娘と結婚した。

そのことを怒った銀造は、幹夫に勘当を申し渡した。

しかし、琴にとって、幹夫は自分の実子同様可愛存在だった。

なんとか良人と幹夫の間をとりなそうとしているうちに、銀造が肝硬変で急死してしまった。

琴は、早速、この機会に、幹夫を呼びもどそうと考えたが、すでに、幹夫の行方はわからなくなっていた。

妻であるヤエにも訊ねてみたが、ある日、突然、姿を消したきり、なんの便りもないという。

勤め先の商社でも同じ返事だった。

幹夫の行方が気になったものの、琴はいったん日本

へ帰って来ざるを得なかった。

というのは、良人の銀造の遺言で、自分の骨は内地の土に埋めてくれということだったからである。

それがブラジルに移住した旧きコロニアたちに共通の故国に対するあこがれなのである。

良人の遺言に従って、琴は良人の遺骨を抱いて、故郷の千葉県へ帰り、親戚を集めて、盛大な法要を行うとともに、新しく墓石も立てて、良人の遺骨を葬った。

そうしながらも、琴はブラジルで行方不明になってしまった幹夫のことが気がかりでならず、何度も現地の知り合いに電話や手紙で、幹夫の消息を訊ねた。

その結果、わかったことは、どうやら、幹夫は麻薬売買の容疑で、警察に逮捕されたらしいという噂だった。

しかも、二世の妻のヤエとは、それ以前に女の問題から別居していて、離婚話まで出ていた事実も判明した。

ただ、幹夫がどこの拘置所に入れられ、どういう扱いを受けているのかは、皆目、見当もつかない。

そこで、琴は、自分の手で幹夫の行方を探そうと思いたった。

「自分の手で、幹夫の行方を探そうと思ったって、わしにゃ、どこから手をつけていいかわからんのでう。それで、専門家の私立探偵をブラジルまで連れて行こうと決心したんじゃ」

藤村琴という、およそ、その優雅な名前とはふさわしくない風貌の持主であるこの老婆は、私をにらみつけた。

「どうじゃ、あんた、わしと一緒にブラジルへ行ってくれるだろうな」

「いきなりそう決めつけられても、すぐにご承諾はいたしかねますな」

私は茶色のバッグにつまった一万円の札束に気を魅かれながらも首をふった。

「第一、幹夫さんが警察に逮捕されているのなら、ブラジルの警察へ問い合わせるのが一番手っとりばやいでしよう。わたしみたいなブラジルの事情に詳しくない男が行ったって役に立つとは考えられない。ブラジ

ルには、日系人がたくさんいると聞いている。その中には、警察官にも弁護士にも優秀な人材がいるはずだ。そういう方たちに、相談してみてもどうなんですか？」

「そんなことは、云われるまでもなく、相談してみたいわい」

老婆は舌打ちした。

「あんたはブラジルの事情を知らんから、そんな呑気なことを云うておられるんじや。ブラジルでは、麻薬の不法所持というたら重罪なんじや。しかも麻薬の売買を行ったとなったら、どんな刑を科せられる。

たしかに、ブラジルには弁護士はたくさんいるよ。なんせ、大学の法科を卒業したら、みんな弁護士の資格がとれるんじやから。だが、その弁護士のなかでも、本当に腕のあるのは数えるほどでな。しかも、そんな弁護士に頼むには法外な金がかかる」

「たとえ、いくら弁護士料がかかって、わたしをブラジルまで連れていって、なんの役にも立たない調査をさせるより、ずっとましなはずだ」

「わたしはな、幹夫が麻薬を吸ったり、売り買いした

りするような男でないことは、よくわかった」

「節くれだつた右手が、デスクをばげしくたたいた。

「弁護士に頼んだところで、せいぜいやってくれるのは、警察や裁判所に顔を利かせ、刑務所から幹夫を出してやることぐらいじや。わしはそれでは満足でけん。幹夫がなぜそんなめにあわされたのか、はっきり真相を知りたいんじや」

「つまり、幹夫さんは誰かの毘にはめられ、無実の罪で、刑務所に入れられているとお考えのわけですか？」

「そのとおり」

老婆は大きくうなずいた。

「幹夫をその毘にかけたやつを、あんたに探さしてもらいたい」

「しかし、ブラジルという、たしか、ポルトガル語が通用語でしたな。わたしは英語ならいくらかしやべれるが、ポルトガル語となると、まるきりわからない。向うの警察機構や裁判についても無知だし、刑務所内がどうなっているかも見当がつかないんです」

私はふたたび首をふった。

「やっぱり、この仕事は、わたしの手に負えそうもあ

りませんな」

「十年前のあんただったら、そんな弱気を吐いたかな？」

老婆は首を伸ばし、私をじっとみつめた。

「十年前、あんたはたった独りで、浜内組という暴力組織の実体を調べあげ、そのために、浜内組は解散にまで追いこまれたと云う噂だが……」

「そのことをご存知でしたか」

私は老婆の顔を見直した。

たしかに、十年以前、私は浜内組の内情を調べあげたことがある。

それがきっかけで、刑事を辞め、私立探偵に転業したのだ。

「あの頃は、私も若かった」

と私は苦い思いを噛みしめながら、つぶやいた。

「いや、その上に、自分の同僚を誤射したという負いめが、わたしにあの仕事に執着させた。しかも、その結果はあまり愉快なものではなかった」

「だから、もう二度とそんな仕事には手を出したくないと云いなさるかね？」

老婆はニヤリと笑った。

「わたしには、そうは思えんね。あんたはいまだに、そういう仕事を求めているんじや。だからこそ、大した依頼もないのに、ここでこんな事務所を開いている」

老婆の言葉は、私の胸に突き刺さった。

「とにかく、考えさせてくれませんか？」

と私は答えた。

「いづれ、その気になったら、ご連絡しましょう」

「その気になるのは決っているね」

老婆は立ち上り、デスクの上にメモ用紙を置いた。

「そこに、わたしの連絡場所を書いておいたから、明日にでも電話して下さい」

老婆の予言は的中した。

私が彼女に電話をせざるを得なくなったのは、明日ではなく、その日の夜のことであった。

2

藤村琴という老婆の申し出をどうしようかと、私は夕方まで考えつづけた。

幸い、夕方まで事務所には、誰一人訪問者はなく、考える時間はたっぷりあった。

もつとも、この事務所に訪問者——すなわち、依頼主があらわれるのは、きわめて稀なこととで、私はたいていの場合、ひまをもてあましてゐる。

依頼主が多く、多忙であれば、なにもブラジルくんだりまで行くのを考える余地はなかった。

藤村琴にも断っておいたとおり、私はブラジルの事情について、全くと云つていいほど、なにも知らない。

そんなところへ行つて、依頼主の氣に入る調査のできようはなかった。

(やはり、この仕事は断るべきだ)

そう自分に云いきかせてみたが、目下、仕事のあてのない身としては、彼女の申し出はなかなか魅力があった。

こんなせま苦しい日本にいて、事務所に腰をすえ、いつあらわれるかわからない依頼主を待っているより、いっそ、ブラジルへ飛んでみるのも気分転換にもつてこいかもしれない。

とにかく、できるだけの調査をしてみれば、藤村幹夫の行方も案外つきとめることができるかもしれないし、万が一、つきとめられなかったところで、もともとではないか。努力の結果、無駄骨だったことを認めてくれれば、あの老婆だつて納得するにちがいない。

(いやいや、その考えは甘いぞ)

私の脳裡に、あの強情そうな老婆の顔が浮かびあがつた。

(あの婆さんは、とうてい、そんなことでは納得しそうもない。息子の行方がわかるまで、とことんおれに調査の続行を命じるだろう。そうなると、おれは半永久的に日本に帰つてこれなくなるかもしれない)

陽灼けして皺くちやな老婆にこき使われ、広大なブラジル中を駆けずりまわっている自分を想像するとうんざりしてきた。

のんびりした海外旅行が楽しめるなどと考えていたら、とんでもない大あてちがいで。

(あの婆さんには氣の毒だが、この申し出はご遠慮申しあげよう)

結局、そう決心した。

すぐに電話をして、その旨を伝えようと思ったが、あの婆さんを説得するのはなかなかホネが折れそうだと考え直し、明日、もっともらしい理由をでっちあげて連絡することにした。

とにかく、あの婆さんは苦手だ。

一日に二度も、例の男みたいな野太い声を聞きたくない。

午後六時に、私は事務所からひきあげようとしていた。

そのとき、二人連れの男が事務所へ入ってきた。

一人は一目で特別仕立てとわかる、シルヴァー・グレイの三ツ揃いを一着に及んだ中年男で、もう一人は、スウェードの黒い革ジャンパーに純白のほつそりしたズボンをはいた若い男だった。

二人とも、凝った金目のものを身につけてはいるが、あまり上品な職業の人間には見えなかった。

「あんたが、志田さんだね」

中年の男の方が、すでに残り少なくなった頭髮を撫でつけながら、横柄な口調で云った。薄いブルーの色が入った眼鏡の奥で、細くて小さな眼が私をみつめて

いる。

あまりまたたきをしない爬虫類に似た眼で、その眼でにらまれると、たいいていの人間は怖れをなして自分の云うとおりになるのだと暗示しているかのようだった。

私はそうだと答え、動物園の檻の外から観察している眼つきで、男を見返した。

そんな私の視線が気に入らなかったのか、男はあからさまにイヤな顔つきをした。

「実は、あんたに折入って相談があるんだがね」

中年の男は、視線を自分の指先に落とした。その指の爪は、入念に手入れされていて、マニキュアまでほどこされてあった。

「今日、ここへ藤村琴という婆さんが来ただろう。あんたに息子のことで、調査を依頼したはずだ。その依頼を断ってほしい」

「ずいぶん、勝手な言い分ですな」

ついさっきまで、藤村琴の依頼を断ろうと決心していた私だが、この男の押しつけがましい言い方が気に入らなかった。